

「無自覚」という凶器

朝日町立朝日中学校3年

鮎田 果歩

「おはよう！」

朝八時十五分の教室。元気いっぱいの挨拶が飛び交っている。何気ない日常の中の、何気ない瞬間。しかし、この瞬間を迎える時、私の心にはある「懸念」が静かに浮かぶ。

今から約八十年前。時計の針が同じ位置を指したその瞬間、ヒロシマに原子爆弾が投下された。一瞬にして奪われた、約十四万人もの尊い命。その重みを思うと、目の前に広がる眩しい光景が、ガラス細工のように脆いものを感じられてならない。

かつて、ヒロシマの街で懸命に生きていた人々の命や日常は、たった一発の爆弾によって、理由もなく、一瞬にして消し去られた。私たちはその悲惨な事実を、平和学習などを通して知識としては知っている。しかし、心のどこかで、それは「過去の出来事」であり、「自分とは無縁の遠い物語」だと思い込んではいないだろうか。

以前の私が、そうだった。私は幼い頃から、戦争を体験した曾祖母の話を聞いて育った。学校にいたときに爆撃を受けたことや、亡くなった友人を捜し歩いたことなど、今の生活からは想像もつかない出来事を、彼女は語ってくれた。当時の私は、これをただ「怖い」と感じるばかりで、それ以上深く考えることはなかった。平和な日常の中で生きている私にとって、それは現実味のない、遠い世界の出来事に思えていたからだ。

しかし、ニュースなどで今も世界のどこかで戦争や紛争が続いている事実を目にしたとき、私は気づいた。あの話は決して過去のものではない。今、自分のすぐ隣にある現実なのだと。そして同時に、自分が平和を当たり前のものであるとして受け止めていたことにも気づいた。このとき初めて、私の中に「懸念」が生まれた。それは、「平和への無自覚」だ。

平和とは、空気のようなものだ。あって当然、無くなるはずがない。そう信じ込んでいるからこそ、その尊さを日々の暮らしの中で意識することはない。しかし、歴史が証明している通り、平和は決して当たり前が続くものではない。崩れ去る瞬間は常に唐突だ。昨日まで笑い合っていた友人と、今日には二度と会えなくなるかもしれない。そんな不条理が、確かにこの国で起きたのだ。

わずか八十年。しかし、その時間は過去の記憶を静かに遠ざけていく。実際、今の社会では「戦争の風化」が問題となっている。それは単に記憶が薄れることだけでなく、平和を当たり前のものであるとして捉え、想像力を失ってしまうことだと私は考える。

では、私たちにできることは何だろう。それは、想像することだと思う。自分とは異なる意見を持つ人を排除しようとしていないか。無意識のうちに誰かを傷つけ、対話を拒んではいないか。そうした日常の中の小さな態度に目を向けること。想像するとは、こうした身近なことから始まると思う。小さな不寛容の積み重ねが争いを生むのなら、小さな想像力の積み重ねこそが平和を守る力になるはずだ。

だからこそ私は、過去を知るだけで終わらせたくない。平和を「あって当然、なくなるはずがない」と捉えるのではなく、日常の言葉や行動の中で守っていききたい。目の前の一人を大切にすること。それが、平和で明るい未来をつくると信じている。

「おはよう！」と交わす、たった一言。その当たり前は、ほんの少しのことで揺らぐものかもしれない。その言葉がある日々を、私はこの先もずっと守っていききたい。